「高度実践看護師（APN）コース」における小児がん看護援助モデルを活用した教育効果

有田直子[1)]、藤田佐和[2)]、森本悦子[3)]、門田麻里[4)]、庄司麻美[5)]、吉岡理枝[6)]

（2018年９月28日受付，2018年12月17日受理）

Educational effects of a childhood cancer nursing care model in an "Advanced Practice Nurse（APN）course"

Naoko Arita[1)]，Sawa Fujita[2)]，Etsuko Morimoto[3)]，Mari Kadota[4)]，Mami Shoji[5)]，Rie Yoshioka[6)]

（Received：September 28. 2018，Accepted：December 17. 2018）

要　旨

「高度実践看護師（APN）コース　小児がんの子どものケア」は、専門看護師や認定看護師を対象に、小児がんをもつ子どものニーズに対応できる高度な実践能力を養成することを目的に行った。小児がん看護における看護師の高度な実践能力とは、理論や知識を実践に有用に活用する専門性の高い統合的アプローチを行う能力であると考え、これらの能力を培うための授業科目を検討し４科目で構成した。本プログラムで受講者は、小児がん看護援助モデルを活用することによってアセスメント力を培い、小児がん看護に特化した看護援助の方向性を考えることができた。今回実施したプログラムの教育の効果や評価に基づいて、次回は洗練化させた内容を実施していきたいと考える。

キーワード：小児がん看護、看護援助モデル、高度実践看護師、教育効果

Abstract

The "Advanced Practice Nurse（APN）course on providing care for childhood cancer patients" targets certified nurse specialists and certified nurses and aims to cultivate high-level practical skills that enable them to address the needs of childhood cancer patients. We considered potential classes and focused on four subjects to foster these skills, which involved the ability to take a highly specialized, comprehensive approach that effectively applies theory and knowledge to nursing practice. Participants of this program cultivated assessment abilities by using the childhood cancer nursing care model, and were able to consider the direction of nursing care specific to childhood cancer nursing. We plan to further refine the contents of the program based on the educational effects and evaluations obtained in the present study.

Key words: childhood cancer nursing, nursing care model, Advanced Practice Nurse（APN）, educational effects

1）高知県立大学看護学部看護学科　講師
Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Lecturer
2）高知県立大学看護学部看護学科　教授
Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Professor
3）高知県立大学看護学部看護学科　教授
Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Professor
4）高知県立大学看護学部看護学科　特任助教
Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Project Assistant Professor
5）高知県立大学看護学部看護学科　助教
Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Assistant Professor
6）元高知県立大学看護学部看護学科　助教
Department of Nursing Faculty of Nursing, University of Kochi, Assistant Professor

Ⅰ．はじめに

本学は、文部科学省平成29年度 多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル、以下がんプロ）」養成プランに採択され、中国・四国の11大学による「全人的医療を行う高度がん専門医療人養成」事業による教育を行っている。本事業は、ライフステージやがんの特性を考慮して、がんとともに生きる人とその家族の健康と生活に関わるニーズに応えられる専門性の高い実践ができる看護師の養成を目的としている。平成29年度は、「小児がんの子どものケア」をテーマに、小児がんの子どものケアに携わる専門看護師や認定看護師を対象に、本学がんプロメンバーでプログラムを開発し、教育コース（リカレント教育）を実施した。

厚生労働省は2013年、15 の医療機関を「小児がん拠点病院」として選定し、2018年７月には、小児がん拠点病院等の整備指針を出し思春期・若年成人（AYA世代）への対応を新設した。小児がんの子どもの治療とケアにおいては、子どもの将来を見据えた視点が重要であり、ライフステージに応じた長期的な視点から考えた体制を整えていくことが求められている。そのため、小児のライフステージにあるがんをもつ子どもは、成長発達に応じた長期にわたる支援が必要となる。このような状況を踏まえ、本教育コースでは小児がん看護に携わる看護師が、小児がんの子どものニーズに対応できるよう、小児がん看護を行ううえで基盤となる理論や知識の学修と、それらに基づく専門性の高い統合的アプローチを修得することを目指した。

本稿では、平成29年度「高知県立大学がん高度実践看護師コース小児がんの子どものケア」の実施内容の報告と、本プログラムで考案した小児がん看護援助モデルを紹介し、「小児がんをもつ子どもの看護援助モデル」を活用した教育効果について報告する。

Ⅱ．倫理的配慮

研修時のオリエンテーションの際に、がんプロ代表者より、本研修内容やがんプロの成果については、誌上報告を行うことや、研修でとられた授業評価は報告に用いる可能性がある旨を説明し、承諾を得た。授業評価については無記名とし、報告で用いる際には、個人が特定されないよう配慮しまとめた。また、教育には事例を用いたが、演習用に作成したモデル事例であり、個人情報は含まれていない。

Ⅲ．「高知県立大学がん高度実践看護師コース小児がんの子どものケア」の概要

１．教育目的･目標

１）教育目的

本教育コースは、すでに実践で活躍している小児がんの子どものケアに携わる専門看護師や認定看護師を対象に、小児がんをもつ子どものニーズに対応できる高度な実践能力を養成することを目的とした。小児がん看護における看護師の高度な実践能力とは、理論や知識を実践に有用に活用する専門性の高い統合的アプローチを行う能力であると考え、これらの能力を培うための授業科目を検討し４科目60時間（８日間）で構成した。

２）教育目標

授業科目は「小児がん看護基盤論」「小児がん診断治療学」「小児がん看護実践論」「小児がん看護展開論」の４科目で構成し、科目ごとに教育の達成目標を設定した。

（１）小児がん看護基盤論

①小児がんの発症年齢や発症時の発達段階による子どもの課題の違いや、AYA世代のがんについて理解する。

②諸理論や小児の成長・発達について、小児がん患者の看護への活用法や適用について理解する。

③小児がんをもつ子どもの心理・社会的な課題について理解する。

④小児がんをもつ子どもにかかわる倫理的な課

題を理解し、看護の役割について説明できる。

（２）小児がん診断治療学

①小児がんの病態、診断治療のプロセスを理解する。

②小児がんの支持療法である栄養管理について理解する。

③小児がん治療後の課題と長期フォローアップの必要性について理解する。

（３）小児がん看護実践論

①小児がんをもつ子どもとその家族の特徴を踏まえ、小児がんをもつ子どもの包括的なアセスメントができる。

②小児がんをもつ子どもとその家族の特徴を理解し、看護援助を提案することができる。

表１．授業科目・時間数と授業概要

授業科目名･時間数	授業概要
1．小児がん看護基盤論 1 単位 15 時間	小児がんの子どものケアにおいて、小児看護学の基盤となる理論や小児の成長・発達の知識を有用に活用することを学修する。また小児がんを持つ子どもにかかわる倫理的な課題、AYA(Adolescent and Young Adult)世代のがんや課題について学び、小児がん看護を行う上での基盤となる専門的知識を養う。 ・諸理論や小児がんの子どもの成長・発達を踏まえたアセスメントとアプローチの実際 ・小児がん看護にまつわる倫理的課題とアプローチの実際 ・小児がんをもつ子どもの発達段階による課題の特徴（AYA 世代含む） ・小児がんをもつ子どもの心理社会的な課題
2．小児がん診断治療学 1 単位 15 時間	小児がん看護において必要となる小児がんの診断治療のプロセス、小児がんの病態を学び、診断法、治療法を理解する。また成長･発達過程にある治療を行う子どもの支持療法である栄養管理や、治療後の課題と長期フォローアップについて学び、小児がん看護を行う上で必要な小児がんの診断治療における専門的知識を養う。 ・ALL　急性リンパ性白血病 ・AML　急性骨髄性白血病 ・横紋筋肉腫、ユーイング肉腫 ・脳腫瘍　神経芽腫 ・非ホジキンリンパ腫 ・小児がんの子どもの栄養 ・小児がんをもつ子どもの治療後の課題と長期フォローアップ
3．小児がん看護実践論 1 単位 15 時間	小児がんをもつ子どもとその家族の包括的アセスメントとケアと、小児がん看護の実践において必要な知識を学び、小児がんをもつ子どもの統合的アプローチを修得する。 ・小児がんをもつ子どもの症状マネジメント ・小児がんを持つ子どもの苦痛緩和ケア ・小児がんをもつ子どもの身体･心理･社会的アセスメントとケア(小児がん看護における包括的なアセスメントの視点) ・小児がんを持つ子どもの家族への支援 ・小児がんの子どもの End of Life ケアと看護における課題（演習：事例検討を含む） ・小児がんの子どものチーム医療と多職種連携
4．小児がん看護展開論 1 単位 15 時間	科目 1～3 の学修を踏まえて、看護実践の展開、小児がん看護介入モデルを考案する。 ・演習

（４）小児がん看護展開論

①（１）～（３）の科目の学修を踏まえた看護実践を展開する能力を獲得することができる。

②小児がん看護介入モデルを考案することができる。

③小児がんを持つ子どもの長期フォローアップ体制を理解し、質の高い生活を支援する方策を考案できる。

２．授業科目の概要

本プログラムは講義と演習で構成されており、４単位60時間（８日間）の履修を必要とした。授業科目･時間数と授業概要について表１に示した。平成29年度の受講者は、13名であった。

Ⅳ．プログラムの実施内容と小児がんをもつ子どもの看護援助モデルの考案

１．小児がんをもつ子どもの看護援助モデルの考案

本プログラムは、「小児がん基盤論」「小児がん診断学」「小児がん看護実践論」の３科目の学修を踏まえて､「小児がん看護展開論」にて演習を行い、看護実践の展開や小児がんをもつ子どもの看護援助モデルを考案することを目標においた。

「小児がん基盤論」「小児がん診断学」では、小児看護の基盤となる理論や小児の成長・発達に関する知識や小児がん診断治療における専門的知識を養うため、外部講師にも依頼し、教育、臨床で小児がんの子どもの治療やケアに携わっている専門性の高い講義を受講者は受けた。また「小児がん看護実践論」では、小児がんをもつ子どもとその家族の包括的アセスメントやケアを学び、統合的アプローチを修得するため、教育、実践で活躍している小児看護専門看護師に講師を依頼した。講師は専門看護師としての豊かな実践事例を取り入れた授業を展開し、小児がん看護の高度な実践を可視化した講義を行った。

「小児がん基盤論」「小児がん診断学」「小児がん看護実践論」の３科目を踏まえ「小児がん看護展開論」で１コマ、グループワークにて事例分析を行った。受講者は提示した事例を展開し、小児がんを発症することで子どもが体験したプロセスを辿り、多角的なアセスメントの視点を持つ必要性を捉えていた。この事例分析での受講者の反応と３科目の受講者による授業評価から、がんプロメンバーと講師で検討を行い、看護援助モデルがあることにより、小児がんをもつ子どもを包括的な視点でアセスメントし、小児がん看護に特化した看護援助の方向性を導き出すことができると考え、小児がんをもつ子どもの看護援助モデルを考案した。考案した小児がんをもつ子どもの看護援助モデルには、「小児がん基盤論」「小児がん診断学」「小児がん看護実践論」の３科目の学修から、小児がんをもつ子ども・小児がんをもつ子どもがいる家族の援助を可視化するための、４つのアセスメントの視点を導き出した。

「小児がんをもつ子どもの看護援助モデル」とは、小児がんをもつ子どもや小児がんをもつこどもがいる家族を、ケアを対象として中心に位置づけ、「小児がんの発症がもたらす子どもの影響や変化のアセスメント」「子どもの力の発達を理解する成長･発達に関するアセスメント」「家族としての体験を理解するアセスメント」「倫理的課題のアセスメント」のトータルケアの視点からアセスメントすることで、必要な看護援助の方向性を可視化していくものである(図１)。これらのアセスメントの視点を活用する際には、授業で学修した専門的知識、理論や小児の成長・発達の知識に基づきアセスメントを行うことを目指した。

２．小児がんをもつ子どもの看護援助モデルを活用した演習の目標と計画

がんプロのメンバーで検討し、「小児がん看護展開論」における小児がんをもつ子どもの看護援助モデルを活用した演習の目標をあげ計画を立案した。

１）目標

①今までの学修を踏まえ考案した「小児がんをもつ子どもの看護援助モデル」を活用して包

括的なアセスメントの視点から事例分析を体系的に行い、小児がんをもつ子どもや小児がんをもつ子どもがいる家族の看護援助を考えることができる。

②小児がんをもつ子どもの看護援助モデルを活用した評価からモデルの有用性を検討し、看護実践に役立つ自分なりのモデルを作成することができる。

2）計画

①小児がんをもつ子どもの看護援助モデルを活用し、小児がんをもつ子どもを包括的な視点でアセスメントすることで、小児がん看護に特化した看護援助の方向性を考える。

②事例展開を行い、事例の子どもにスペシャリストとしてどのようにかかわるのか、高度実践看護師としての看護援助を考える。

③小児がんをもつ子どもの看護援助モデルを活用することで、自分自身の実践に役立つ小児がんをもつ子どもの看護援助モデルを、受講者が作成する。

3．小児がんをもつ子どもの看護援助モデルを活用した演習の展開

小児がんをもつ子どもの看護援助モデル(図１)を活用してグループで事例展開し、事例の小児がんをもつ子どもや家族にとって特化した看護実践を導き出し、看護援助モデルの有用性について評価するため、以下のステップ１から５を踏んで演習を行った。受講者は２グループに分かれ、２日間(13時間)にわたって演習を行い、本学がんプロメンバーの教員であるがん看護学領域の教員や、がん看護専門看護師、小児看護専門看護師など５名が担当した。

ステップ１：考案した看護援助モデルの理解

今までの講義内容を踏まえ小児がんをもつ子どもの看護援助モデルを考案し、受講者に看護援助モデルについての説明を行い、その後モデルを理解するため質疑応答を行う。

ステップ２：小児がんをもつ子どもの看護援助モデルを活用した事例展開

①７歳のAちゃん（急性リンパ性白血病）のモデル事例を、看護援助モデルを活用しグループワークにて検討する。モデルにあるアセスメントの視点を活用し前日の演習内容を踏まえてアセスメントを再検討する。

②アセスメントを行い、Aちゃんの全体像とともにAちゃんにとって焦点が当たっている困難なこと（看護上の問題）、必要な看護援助の方向性を可視化する。

③Aちゃんや家族のケアの看護目標をおき、①②からトータルケアの視点で小児がんをもつAちゃんに特化した看護援助を検討する（Aちゃんの看護援助を出す）。立案された看護援助をAちゃんや家族に実践するにあたって、チームの中で小児がん看護のスペシャリストとしてどのようにかかわっていくことができるのか計画を立てる。その後、看護援助の評価の視点を検討する。

④グループごとの発表を行う。

ステップ３：小児がんをもつ子どもの看護援助モデルの評価

①看護援助モデルを活用しての評価を、以下の視点などから行う。

・今までの講義内容を踏まえて実際にアセスメントを行う上で有効であったのか
・アセスメントの視点の追加・修正点はないか
・子どもの全体像を捉えることはできたのか
・アセスメントの視点から事例の子どもにとって特化された看護援助を考えることができたか　など。

②評価した内容を発表する。

ステップ４：グループ（受講者）で考えた看護援助モデルの作成

グループメンバーで、ステップ３において小児がんをもつ子どもの看護援助モデルを評価した結果、追加する必要があるアセスメントの視点を、原案である小児がんをもつ子どもの看護援助モデル（図１）に追加し、新たな看護援助モデルを作成する。

ステップ5：グループで考えた小児がんをもつこどもの看護援助モデルを活用した事例展開

①ステップ４にてグループより提案された必要なアセスメントの視点を、小児がんの子どもをもつ看護援助モデルに追加し、作成する。

②アセスメントの視点を追加し作成した小児がんをもつ子どもの看護援助モデルを用いて、青年期の事例でグループワークを行う。ステップ２の①～③に沿って行う。

③上記②を行った後、以下の検討を行う。

・看護援助モデルのアセスメントの視点で重点を置いたところはどこか、事例による特徴的なところはどこか

・事例の子どもにとっての困難さや看護援助の方向性が浮かび上がったか、また、事例によってアセスメントの視点の重点おくところの違いが理解できたか

④グループごとの発表を行う。

ステップ６：演習を通して検討した結果を小児がんをもつ子どもの看護援助モデル（図１）に戻り評価する

・講師より全体のまとめとして原案である考案した小児がんをもつ子どもの看護援助モデルを評価する（図２：図１を活用した事例展開により導き出した看護援助を図式化した。）

４．受講者の学びとメンバーによる評価

１）受講者による授業評価

受講者13名のうち「小児がん看護基盤論」「小児がん診断治療学」「小児がん看護実践論」を学修し、「小児がん看護展開論」まで通して受講したものは10名であった。

研修後の「小児がん看護展開論」の授業評価の自由記載部分を抜粋し、まとめた(表２)。

２）がんプロメンバーによる研修の評価

受講者によるアンケート結果を踏まえ、がんプロメンバーで以下の研修評価を行い、課題を抽出した。

表２．受講者による小児看護展開論の授業評価

授業目標	目標1.「小児がん看護基盤論」「小児がん診断治療学」「小児がん看護実践論」の学修を踏まえた看護実践を展開する能力を獲得することができる。 目標2. 小児がん看護介入モデルを考案することができる。
授　業　評　価	
目標達成について	・それぞれの授業の理論をもとに実践に活かしていくことができそう。 ・視点、考え方、実践に向かうまでの導き方がすごく学べた。 ・グループワークを行うことで様々な視点で考えることができた。 ・皆で協力しながら実践を展開する能力を獲得することができた。 ・介入や自分の実践への活用も含めまだまだこれからと思っている。 ・活用することはできたが、まだ活用しきれていないところもある。 ・モデルを活用することはできたが自分で考案までには至らなかった。
授業内容について	・グループワークは様々な意見・考えを聞きながら自分の思考にも気づき、多角的なアセスメントにつながり実践でも活用できるものだった。 ・グループワークを通して 1 つの事象でも様々な方向からみて話し合うことで深めることができた。 ・個人で展開させるよりもディスカッションをすることでより学びが深まった。 ・専門看護師としてチームにどう働きかけるか、一緒にケアを考えられるかという視点で捉えることができた。 ・時間が限られた中であったが、その中で考えていくトレーニングにもなった。 ・もっと様々な事例で行いたいし介入や評価までいきたかった。 ・アセスメントに時間がかかり、介入の方向性まで考えられなかった。もう少し時間がほしかった。

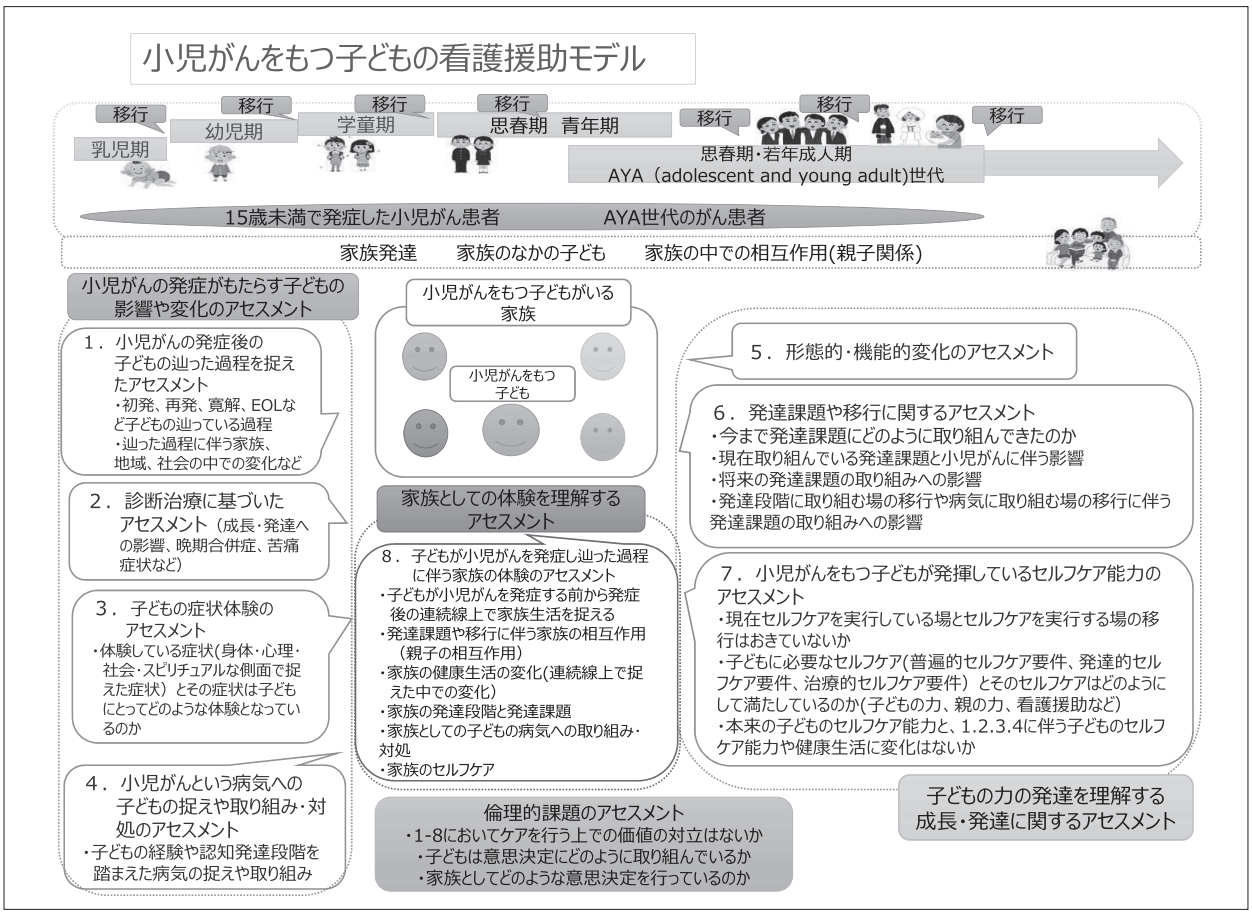

図１．考案した小児がんをもつ子どもの看護援助モデル

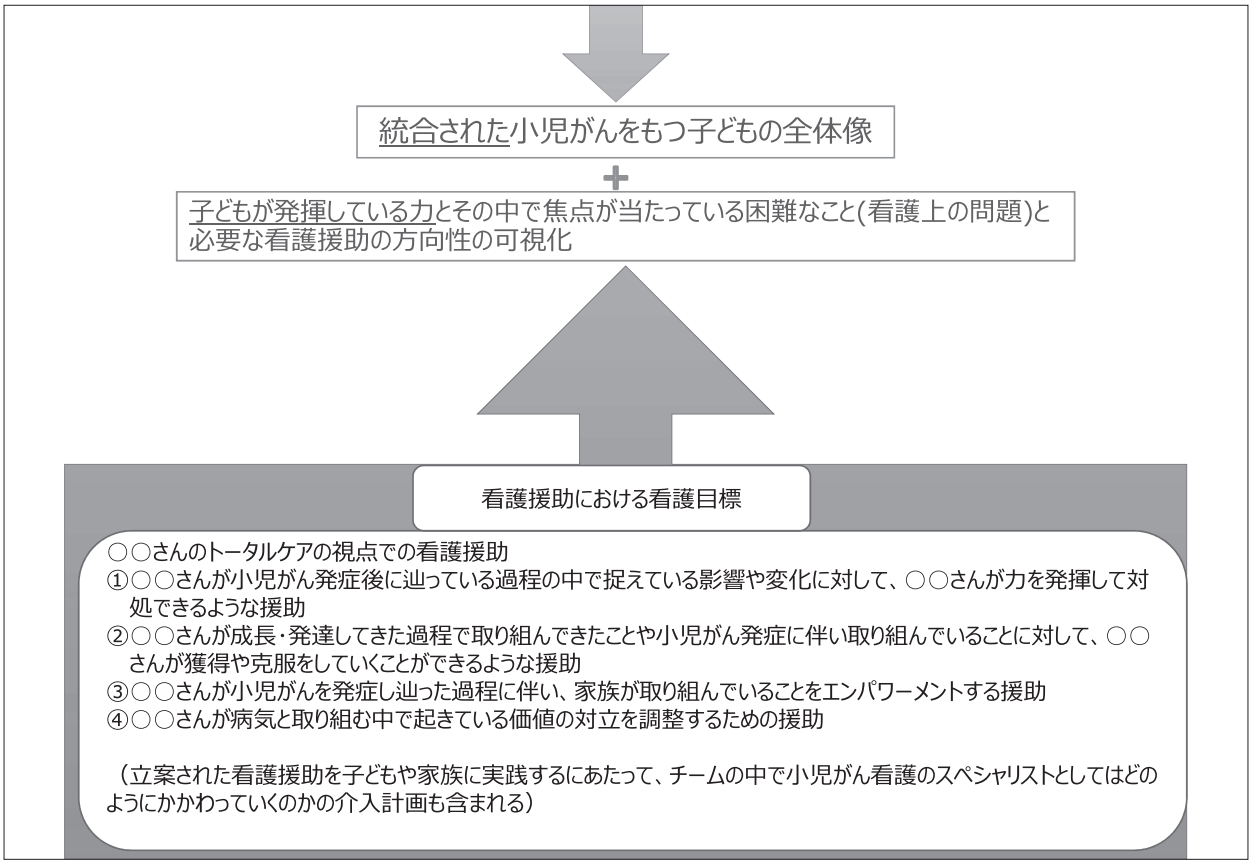

図２．看護援助

（1）がんプロメンバーで検討を重ね、小児がん看護に関して必要な内容は、４単位60時間で網羅して行うことができたと考える。小児看護では成長発達の視点を基盤に置き考えていくが、看護援助モデルにおいても成長発達の視点のアセスメントを強化できるよう作成したため、小児がん看護においても同様であることが、受講者に十分伝わったと考える。

小児がん看護においては、AYA世代を成長発達という視点から考えることが重要となるため、今後も重ねていくことが必要である。

（2）考案した小児がんをもつ子どもの看護援助モデルを活用し、モデル事例の子どもや家族のケアについて、学んだ理論や知識を統合させて考えていくという方法を取り入れた。その結果、理論やモデルを活用して実践を考えていくことができ、専門看護師としてのアセスメント力を養っていくことにも繋がったと考える。

高度実践看護師は看護を実践していく上でのアセスメント力が問われるため、今回のプログラムではアセスメントに力を入れた。受講者としては、看護介入についても十分に検討したかったという意見もあり、今後はアセスメント力を高めることに力を入れるとともに、方法論にすぐに着目していくのではなく、アセスメントから看護介入を導く力を培うための教育方法の検討も行っていくことが必要である。

Ⅴ．考察

本教育コースは、専門看護師や認定看護師を対象に小児がんをもつ子どものニーズに対応できる高度な実践能力を養成することを目的とし、理論や知識を実践に有用に活用する専門性の高い統合的アプローチを行う能力を培うためのプログラムの構成を行った。

ここでは本プログラムに取り入れた小児がんをもつ子どもの看護援助モデル活用による教育効果、評価について述べる。

1．看護援助モデル活用による教育効果

受講者による授業評価から、「多角的なアセスメントにつながり実践でも活用できるものだった」「それぞれ授業の理論をもとに実践に活かしていくことができそう」「視点、考え方、実践に向かうまでの導き方がすごく学べた」等、理論を実践に繋げられると受講者自身が捉えていると考えた。「小児がん看護展開論」の中で導入した学んだ理論や知識を統合させ考えていく看護援助モデルを活用した教育方法は、受講者が理論やモデルを活用し実践を考えていくことにつながっていたと考えられた。高度実践看護とは、実践の指針として研究のエビデンスの考え方を十分に活用するということだけではなく、理論に基づき考えることであると言われており、理論は実践をより意味があるものとしていく（Hamricら,2017）。理論は、子どもや家族の看護をより体系的、包括的な実践にしていくことを助ける。よって受講者が、理論をもとに実践を考えていく思考を養うことができた教育方法は、高度実践看護師としての能力を高めるリカレント教育として効果的であったと考えられた。

本プログラムでは、講師から考案された小児がんをもつ子どもの看護援助モデルを、受講者が活用し、その評価からモデルの有用性を検討し看護実践に役立つ自分なりのモデルを作成することを目標にあげ演習を行った。演習では、受講者がモデル事例の子どもや家族に、チームの中でスペシャリストとしてどのようにかかわるのかという視点を基盤に置いたグループワークを取り入れた。

受講者の授業評価は、「専門看護師としてチームにどう働きかけるか一緒にケアを考えられるかという視点で捉えることができた」「時間が限られた中であったが、その中で考えていくトレーニングにもなった」「個人で展開させるよりもディスカッションをすることでより学びが深まった」等があった。看護援助モデルを活用して、小児がんの子どもを包括的な視点でアセスメントすることを重視したグループワークは、受講者が高度実

践看護師として直接的ケアを提供する、実践力の向上に繋がるものとなっていたと考える。さらに他者とディスカッションし看護援助の方向性を導いていった学びは、相談者とともに子どもや家族にとって最善のケアを考えていくコンサルテーション能力を向上させるものになっていたと考えられた。

一方、「アセスメントに時間がかかり、介入の方向性まで考えられなかった。もう少し時間がほしかった」という授業評価がされており、今後、受講者のニーズを反映させた授業展開を検討することも必要である。

２．プログラム構成の評価

本プログラムでは、「小児がん看護基盤論」「小児がん診断治療学」「小児がん看護実践論」で学んだ理論や知識を、「小児がん看護展開論」で繋げていき統合させて看護援助を考えていくことを目指している。「小児がん看護展開論」での看護援助モデルを活用した演習を実施するにあたり、３科目終了後、看護援助モデルは活用せず、１コマの事例分析の授業を導入し実施した。事例分析のグループワーク後に発表を行い、受講者は講義内容を踏まえて小児がんを発症することで子どもが経験したプロセスを辿っており、多角的なアセスメントの視点を持つことの必要性を捉えていることが伺えた。

そこで、がんプロメンバーにて受講生の学修状況を踏まえた評価を行い、「小児がん看護展開論」の具体的な演習方法を検討した。「小児がん看護展開論」で、全４科目を統合させていくことができるよう、受講者が今までの３科目の教育で学修した知識に基づき、考案した看護援助モデルを活用し包括的なアセスメントから体系的に援助を考えていく方法を可視化した。さらに、考案した看護援助モデルを活用し事例展開を実施した後、受講者が必要なアセスメントの視点を加えた看護援助モデルを作成し、その作成した看護援助モデルで事例展開を行えるよう、ステップを踏んだ演習方法を取り入れた。受講者は演習内容の展開が可視化できたことで、一人ひとりが高度実践看護師としての役割を意識して積極的に意見交換を行っており、知識と実践を結びつける方略を培うことに繋がったと考える。

本学はがんプロ連携大学として、平成24年度より「質の高い在宅がん看護実践を創造していく看護師養成プログラム」を実施（藤田ら,2014）し、PDCAサイクルを取り入れた評価により洗練化した研修プログラムを５年間、取り組んできた（森本ら,2017）。それらの実績をいかし、本プログラムの実施過程において、実行した授業内容をがんプロメンバーで評価する方法をとり、「小児がん看護展開論」の具体的な方法を構築させていったことが、効果的な授業展開につながったと考えた。

Ⅵ．おわりに

本プログラムは、「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル、以下がんプロ）」養成プランによる「高度実践看護師（APN）コース」において、第2回「小児がんをもつ子どものケア」を開講する予定である。今回のプログラムにおける教育の効果や評価から課題をがんプロメンバーで検討し、洗練化した教育コースを実施していきたいと考える。

文献

Hamric, A.B., Hanson, C.M., Tracy, M.F., O'Grady, E.T.（2014）. 中村美鈴, 江川幸二（2017）. 高度実践看護―統合的アプローチ,へるす出版,東京.

藤田佐和, 弘末美佐, 廣川恵子, 石井歩（2014）.「質の高い在宅がん看護実践を創造していく看護師養成プログラム」の教育効果と課題, 高知県立大学紀要看護学部編, 63,51-63.

森本悦子, 橋本理恵子, 藤田佐和, 庄司麻美, 青木美和（2017）.「質の高い在宅がん看護実践を創造していく看護師養成プログラム」の活動報告―４年間の実施概要とプログラム洗練化の取り組み―, 高知県立大学紀要看護学部編, 66. 35-42.